

研究

胃の集団検診で発見される進行胃癌の実態

浜松赤十字病院 健診センター

井上富夫, 鈴木公美子, 守田孝司

浜松赤十字病院 内科

高井泰彦, 俵原 敬, 早川正勝, 杉原達男, 亀井 康

要 旨

胃集検の主目的は、より早期の救命可能な胃癌を発見する事である。しかし胃集検では、進行胃癌も数多く発見されている。著者らは健診センターにおいて長年胃集検を実施しており、集検にて発見された進行胃癌の特徴について病院発見進行胃癌を対照として検討し以下の結果が得られた。逐年検診を行なうことにより、発見される胃癌中進行癌の割合は著しく低下する。進行癌の割合をみると、病院群と比較して集検群では低率で、且つ pm 癌の占める割合が高い為手術率も高く、進行癌であってもより救命可能な癌をひろい上げているものと思われる。又、集検群で発見される進行癌は病院群より約12才若く、その為基礎疾患を有する割合も有意に低く、手術率を高める要因になっている事が明らかになった。

Key words

胃集検, 進行胃癌

緒 言

わが国の胃の集団検診（以下胃集検と略す）は、昭和26年頃より、入江¹⁾、黒川²⁾、有賀³⁾等により始められ、次第に全国に普及し、より早期の救命可能な胃癌の発見に寄与している。このことより、現在胃癌の第2次予防対策としての胃集検の有要性は周知の通りである。又、胃集検では良性疾患や胃外病変も数多く発見され、この点での検討も行なわれている⁴⁾。

著者らは、当健診センターにおいて長年胃集検を実施しており、胃集検にて発見される進行胃癌の特徴を検討し若干の知見を得たので報告する。

1. 対象および研究方法

昭和61年4月より平成8年3月迄の10年間を、前期、後期各5年に分け、当健診センターで実施した胃集検発見胃癌を対照に同期間に当院で発見された病院発見胃癌を対照として以下の事項について比較検討を行った。

- a) 前後期の集検胃癌発見率
 - b) 発見胃癌中の進行癌の割合
 - c) 発見進行癌中 pm 癌の割合
 - d) 進行癌の手術率
 - e) 年令分布
 - f) 有する基礎疾患
 - g) その他
- 尚、有意差検定は χ^2 検定にて行った。

2. 成 績

前期・後期の発見胃癌数は表1のごとくで、集検発見胃癌は前期17例、後期15例であり、病院発見

表1 発見胃癌（対象）

	集検群	病院群（対象）
前 期	17 例	197 例
後 期	15 例	160 例
計	32 例	357 例

集検胃癌発見率

前 期： 17/42625 × 100 = 0.040%

後 期： 15/30759 × 100 = 0.049%

胃癌は前期197例，後期160例であった。又，集検胃癌発見率は前期0.040%，後期0.047%であった。

発見胃癌中に占める進行癌の割合は図1に示すごとくであった。集検群では前期52.9%より後期26.7%へ減少し，病院群では前期73.2%より後期58.8%へいずれも進行癌の割合は著しく減少した。又，病院群と比較して集検群では，前後期共進行癌の割合が有意に低率であった。

《集検群》

	発見胃癌	早期癌	進行癌	進行度の割合
前期	17例	8	9	52.9%
後期	15例	11	4	26.7%
計	32例	19	13	40.6%*

《病院群》

	発見胃癌	早期癌	進行癌	進行度の割合
前期	197例	33	164	83.2%
後期	160例	66	94	58.8%
計	357例	99	258	72.3%*

*p<0.01

図1 発見胃癌中の進行癌の割合

更に発見進行胃癌中のpm癌の割合は図2に示すごとくで，集検群は23.1%で病院群の14.3%と比較して高率であったが有意差は認められなかった。

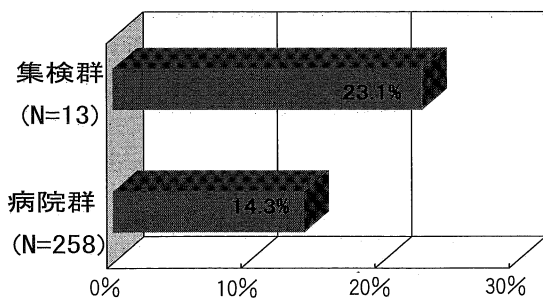


図2 発見進行胃癌中のp.m癌

次に進行癌の手術率についてみると表2のごとくであった。手術率は集検群で前期は9例の全てに，後期4例中3例に施行され，手術率は計92.3%であった。それに対し病院群では前期164例中104例と，後期94例中54例に施行され，手術率は計61.2%であった。手術率は集検群で有意に高率であった。

表2 進行癌の手術率

《集検群》

	進行癌	手術例	手術率
前期	9例	9例	100.0%
後期	4例	3例	75.0%
計	13例	12例	92.3%

《病院群》

	進行癌	手術例	手術率
前期	164例	104例	63.4%
後期	94例	54例	57.5%
計	258例	158例	61.2%*

*p<0.01

更に集検群と病院群との間で次の項目についての検討を行った。①年令，②潰瘍既往症，③基礎疾患・合併症，④血液型，⑤喫煙，⑥飲酒，⑦ポールマン分類，⑧深達度，⑨占拠部位（CMA分類），⑩組織型（表4）

年令及び基礎疾患・合併症以外の項目については両者間に有意差は認められなかった。

進行胃癌の平均年令をみると図3のごとくで，集検群54.5才，病院群66.2才であった。

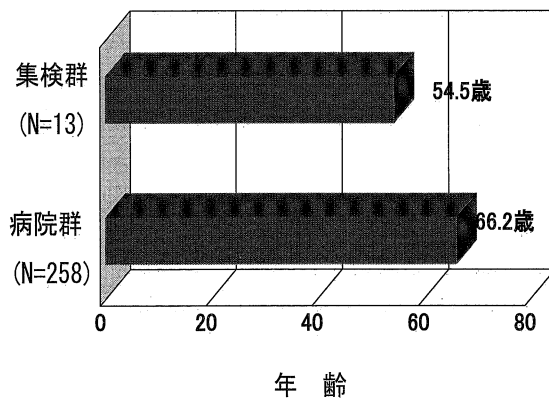


図3 進行胃癌の年令

又，基礎疾患・合併症を有する進行胃癌の割合は図3のごとくで，集検群15.4%，病院群49.6%で集検群に有意に低率であった。認められた基礎疾患・合併症は高血圧，糖尿病，狭心症，脳梗塞，胆石症，慢性肝炎，肝硬変，アルコール依存症，肺気腫，気管支拡張症，慢性関節リウマチ，重複癌等で，それぞれの疾患別にみると集検群の症例

数が少ない為、両群間には、有意差は認められなかった。

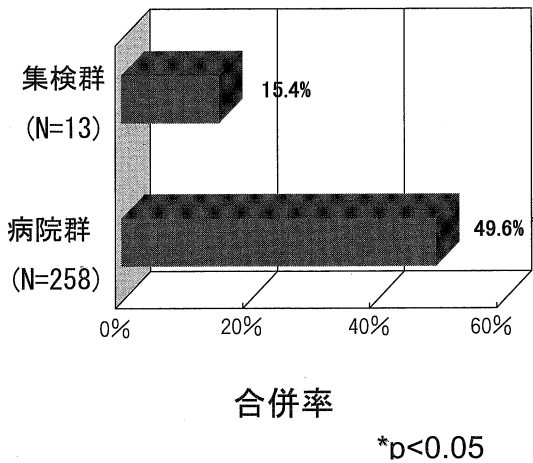


図4 基礎疾患 合併症を有する進行胃癌の割合

3. 考 察

著者らの実施してきた胃集検においては、胃癌発見率が前期0.040%、後期0.049%と横ばいとなっているが、進行癌の占める割合は前期52.9%から後期26.7%へと著しく減少していた。この傾向は病院発見胃癌においても認められたが集検群で有意であった。当健診センターでの胃集検が比較的限られた地域及び職域を対象としており、逐年検診を行なう事により、より早期の胃癌が多く発見される様になるものと思われる。

胃集検は多くの機関において実施されており、今迄にすばらしい業績が報告されているが、胃癌対策としての胃集検の効果として、集検発見胃癌は病院発見胃癌と比べて早期胃癌の占める率が高く、また進行癌であっても5年生存率が高い事が明らかにされている^{5)~9)}。

そこで、胃集検で発見された進行胃癌の特徴を検討する為に、進行胃癌に占める pm 癌の割合をみると病院群と比較して高率であった。集検群での症例数が少ない為、有意差は認められなかったが、進行癌であってもより救命可能な癌をひろい上げているものと思われた。次に進行癌での手術率をみると集検群では病院群に比べ有意に高率で、この点からも集検群の5年生存率を高めているもの

のと考えられた。

更に、進行癌の年齢、潰瘍既往症、基礎疾患・合併症、血液型、喫煙、飲酒等の患者背景や、ポルマン分類、深達度、占拠部位、組織型といった癌の特徴についての検討を行ったが、年齢及び基礎疾患・合併症以外の項目では集検群の症例数が少ない為か病院群との間で有意差は認められなかった。しかし、平均年齢では集検群が病院群と比較して、約12才若く、基礎疾患・合併症を有する割合も有意に低い為、これらの要因が集検群での手術率を高めているものと考えられた。

4. 結 論

当健診センターでは長年にわたり、年1回の逐年的な集検を実施しており、過去10年間の成績をもとに発見された進行胃癌の特徴について検討し、次の結果が得られた。

- 1) 逐年検診を行なうことにより、発見される胃癌中進行癌の割合は著しく低下する。
 - 2) 進行癌の割合は病院群と比較して集検群で低い。
 - 3) 集検群では進行癌であっても、病院群と比べ pm 癌の占める割合が高率で手術率も高い。
 - 4) 平均年齢は集検群で約12才若く、その為基本疾患を有する進行癌は集検群で有意に低い。
- 以上により、胃集検を行なう事により、より救命可能な胃癌が発見されており、胃集検の重要性が確認された。

文 献

- 1) 入江英雄, 門田弘. 集団レントゲン間接撮影による胃癌の早期発見. 日本医事新報 1953; 1513: 1589-1591.
- 2) 黒川利雄, 齊藤達雄. 胃癌の早期発見. 最新医学 1956; 11: 167.
- 3) 有賀槐三ほか. 胃集団検診について—予備実験並びに試験的検診成績. 日本医事新報 1957; 1754: 13-19.
- 4) 井上富夫. 機械における胃集団検診の効果に関する研究. 日大医学雑誌 1979; 38: 1305-

- 1319.
- 5) 山口正義ほか. 胃集団検診および病院外来で発見された胃癌の比較とその予後. 胃と腸 1971; 6:751-758.
 - 6) 藤井彰ほか. 集検発見胃癌の予後. 癌の臨床 1973; 19:852-858.
 - 7) 楠原敏幸ほか. 胃集団検診で発見された胃癌の特徴—外来胃癌との比較において—. 癌の臨床 1975; 21:169-174.
 - 8) 伊藤弘一. 発見早期胃癌よりみた胃集検の評価. 胃癌と集団検診 1976; 34:3-7.
 - 9) 原威造ほか. トラック運転者を対象とした職域集検. 日大医学雑誌 1976; 35:1153-1158.